

＜意見交換＞

沼尾：小城様からは、県民健康プラザの活動内容と大学との連携の可能性に関するお話をいただきました。鹿屋体育大学の3名の先生方からは、各先生が行っている地域との連携事業に関するお話をいただきました。

今回のテーマは、「地域住民の健康づくり支援に関する鹿屋体育大学の地域連携の可能性について」ということで、お話いただいたところですが、県民健康プラザの小城様より連携の可能性ということで、いくつかの示唆をいただきました。健康づくりを目的として地域と連携しながら大学の特色を生かし、地域住民に対して恒常的な運動の機会を与えるということは、非常に重要であろうと考えます。

そこで北村先生にお尋ねをしたいと思いますが、今回ご紹介された「みんなのタイムトライアル」のようなイベントを他の地域でも連携しながら開催する場合、大学としてどのような協力が可能になるかということをお話いただければと思います。

北村：まずは、大学は色々な資源を持っているわけです。そういったものをいかに地域の方々に使っていただくかということだと思っています。「みんなのタイムトライアル」でいえば、学生がいて、それから競技場があり、そういった資源をスポーツの振興のために地域、鹿屋市と連携をして活用しています。

それからイスラム先生も紹介されていたペットボトル体操も元々生涯スポーツ実践センターのスタッフがいますので、こういったスタッフが持っているプログラムを地域の皆さんに「どうですか」と投げました。先程、中垣内先生の方で少し触れられていましたが、「健康づくりキャラバン」という事業を昨年度まで行っておりまして、それに応募してこられたのが、天城町と宇検村の保健師さんでした。今年度で事業は終わりますが、それをきっかけにして、宇検村では、来年度以降も続けて地域でペットボトル体操の普及をしていきたいという話になってきました。やはりそういったリソースをうまく使っていただけるように、我々大学もできるだけ敷居は下げていかなければいけません。また、皆さんも大学の敷居を高く感じていると思うのですが、ポンと扉を叩いていただければもしかしたら何かそういった地域と

の連携が開けてくるのではないかと感じております。

沼尾：ありがとうございます。

地域連携を進めるにあたって、何か地域でアイデアがあれば大学の方に投げただけであれば何か提供できる可能性があるということですね。

北村：そうです。はい。

沼尾：またその一方で大学というのは、社会的な役割として研究というものが求められると思います。例えば、県民健康プラザと連携しながら研究を推進していく場合には、大学としてどのような貢献が可能なのか、また県民健康プラザだけではなく、自治体などとも連携して研究を進めていくということも大事になってくるかと思しますので、そのような場合、どういう面から協力ができるのか、中垣内先生からお話いただければと思います。

中垣内：先程、県民健康プラザの小城様からお話があった中に、「大学は知見をたくさんもっている」、あるいは、「研究の部分で分析や評価、そのあたりが長けているところがあるので、連携して欲しい」というお話がありました。まさしく我々も自分たちが持ち合わせている知をできるだけ還元することや、あるいは私たちが研究を推進していきたいので、県民健康プラザが取得したデータを見させていただきながら、そのデータをともに活用しながら連携していけるのではないかと考えています。本日、県民健康プラザの小城様の話を伺って、お互いのニーズが非常に合致するのではないかとこのところがありますので、是非、連携させていただければと思っています。

市町村に関しましては、先程も実践研究ということで、ご紹介しました。ただ市町村もニーズがないといけません。鹿屋市の場合は、「運動サロンをとにかくたくさん作りたい」という要望があり、それが我々の考えと合致しました。我々は、そのノウハウを少し持ち合わせているので、そのノウハウを鹿屋市に提供しながら、でも我々もデータが欲しいので、「調査研究には、協力して下さいね」というところです。ニーズの合致ができれば、研究と実践と一緒に各団体と取り組めるのではないかなと思っています。

沼尾：先程の北村先生の話と同様で、やはり大学としては、敷居は低くといいますか、もともと高く設定してはならず、地域の方々に対して、広く開いておりますので、何かアイデアがあれば、ご相談いただき、お互いのニーズが合致すれば連携が可能ということですね。

中垣内：今回の主旨としまして、今ここに30人程の参加者がいらっしゃっています。また、今回はオンラインを使って県内の保健従事者、約100名ぐらいの方々にアクセスいただいていると思います。今言ったように私たちの取り組みを知っていただいて、皆様からのニーズがあれば是非とも大学のドアを叩いてくださればと思っています。

沼尾：ありがとうございます。

少し連携の話からはそれますが、鹿屋体育大学の生涯スポーツ実践センターというのはいくつかのミッションがあります。その中で地域のスポーツ振興や健康づくり、地域スポーツプログラムの育成支援など、そういった面もミッションとしてあげております。生涯スポーツ指導者の育成支援というのも我々のセンターにとっては大事なミッションであります。つまり運動指導現場で活躍できる学生を育成するということになります。その点から、現在の運動指導現場ではどのような人材が求められているか、また、そのような人材を育成するために、大学では学生に対してどのような教育を今後、施していけばいいのかという点について小城様よりお話いただければと思います。

小城：運動指導現場で求められている人材の要素というのはたくさんあるように思います。でも私は3つぐらいに絞られるのではないかと思います。

1つはやはり運動や健康、介護予防も含めて、知識を兼ね備えていること。2つ目は、それらの知識を伝える技術があること。3つ目はもしかすると、これが1番大事なことかなと思うのですが、相手のことを理解しようとする、つまり、対象者が望むこと、対象者がどの様を考えているかを理解しようとするマインドがあることではないかと思っています。そのマインドにはコミュニケーションがある程度、円滑にできるといことがついてくるのではないかと思います。

そういう点から大学の教育に望むこと、人材育成に

望むことを考えると、知識や技術というのはある程度授業や研究活動の中で可能かもしれませんが、そのコミュニケーション力の部分をどのように育成していくかが難しいところではないかと思います。学生はほぼ同年代の方たちの中で暮らしているわけですから、同級生や先輩、後輩のその近い年代ではやりとりがわりと上手にできていると思います。でも、私たちの施設は、高齢者も非常に多いところなので、例えば、年齢が違う人にきちんと挨拶ができる、笑顔でコミュニケーションがとれるなど、そういうところも大事になってきますし、相手がどのような人か、どのような身体の状態かを考えながら指導していただく必要があるのかなと思います。しかし、過去にこられた実習の学生で、運動競技を全力でされている方だったのですが、ストレッチをデモンストレーションでもらったら、自身で普段行っているようなストレッチを実演したのです。「もうそれは無理でしょ」「今日、私たちの施設で、これから運動しようとする人たちにそぐわないですよ」という。そのあたりが、普段自分を中心に考えているからか、相手のことを考えて実演されていないところがあって。何かのデモンストレーションで見せるだけであればよいのかもしれませんが、やはり、見せるということではなくて、支援をしていく場合には、相手に合わせてやっていただくような、そういったところが必要かなと思います。

沼尾：我々も大学では知識の面では様々なことを教えることはできるのですが、コミュニケーションというあたりになるとなかなか深く教えられないなというところはあります。やはり実際の運動指導現場に行ってみて、学生も感じる場所があるのではないかなと思います。そういったところで、実習の際に運動現場に学生が行った際には、色々な面からご指導をいただければと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

では、ここからはフロアから何かご意見、ご質問、連携のご提案などがありましたらお願いいたします。

A：離島から参加させていただいています。健康プラザや鹿屋体育大学の実践例、すごく参考になりました。ありがとうございます。

離島のためになかなか実際の現場を見ていただくことは難しいと思うのですが、例えば、離島で行ってい

る高齢者の教室や特定保健指導の教室プログラムの進め方などの状況を確認していただいて、大学からアドバンスなどをもらうことでの連携ということは可能なのかなと少し思ったのですが、いかがでしょうか。

沼尾：中垣内先生，その点いかがでしょうか。

中垣内：実際，我々が直接指導ということではなくて，高齢者教室や特定保健指導を実践されている保健師さんなどへの助言は可能であろうと思っております。また，コロナ禍においてなかなか離島ともやりとりができない中で，今回もオンラインでやっておりますが，実際にオンラインでの指導も今後は進められるのではないかと思っております。そして，イスラム先生は実際にペットボトル体操の指導をオンラインにて遠隔で取り組まれています。そのあたりを北村先生とイスラム先生のお二人で紹介していただければと思います。

北村：12月の後半に不幸にして本学でクラスターが発生しまして，それまでイスラム先生が宇検村の現地に出向いて指導をされていたのですが，それができなくなってしまいました。ただ宇検村の方としても「教室は続けたい」という意向をお持ちでしたので，「遠隔でやってみましょうか」ということで，宇検村の体育館に参加者の皆さんを集めていただきました。こちらは，研究室からビデオカメラと遠隔の会議システムを使い，イスラム先生の指導の様子を現地の大きなスクリーンに写していただいて，参加者の皆さんのコントロールは現地の宇検村のスタッフの皆さんにお願いしながら，2回実施しました。思ったより非常にうまくいきまして，好評いただきました。今後は，そのようなやり方もできるのかなと考えています。

中垣内：今，私どもも，そのようなことを試行している段階で，実は3月に宮崎県の日向市と連携し，遠隔でボランティアのリーダー向けに研修会を実施しようとしているところです。また鹿屋市とは特定保健指導もオンライン面接ができないかということも今，試行しているところですので，またそのような取り組みができてくれば，情報を共有できるかなと思います。

A：ありがとうございます。

沼尾：ありがとうございました。

その他，質問ございませんか。

B：今日は貴重なお話，ありがとうございました。私どもも公共施設の管理をさせていただいておりまして，県民健康プラザにも業務委託でトレーニングジム，受付，プールの指導にも従事させていただいています。

税金に頼らないといいますか，指定管理者制度の中で実践事業という部分で，私どもも鹿児島市の施設では，公のお金を使って共同研究をさせていただいたり，ジャパンアスリートトレーニングセンター大隅が大隅地区にできましたが，そこでも貴学と共同研究をさせていただいております。国立の鹿屋体育大学は，国立で唯一の体育の専科大学なので国の補助金を取りにくくするためには，鹿児島県との連携，つまり県民健康プラザを管轄している県民総合保健センターとの連携で大きな事業の1つのフォーマットを作ると先程ご質問があった離島なども，遠隔でどこでも広域にプログラムを広げることができる仕組みができるのではないかと感じたところでございました。

指定管理で予算をとるということは行政には非常に難しいことなので，北村先生がお話をされた情報発信型と市民交流型というところの市民交流型のイベントには企業の力も非常に大事になってくるのではないかと感じましたので，健康経営や企業の協賛などでイベントを告知しながら学生の方々にも還元ができるような仕組みというものを作っていけたらというところがございます。

県民健康プラザで従事する貴学の大学院生のアルバイトの方々も非常に優秀な方がいらっしゃって，私どもの施設にも欲しい人材なのですが，その方々の力を使いながら公の施設が持っているデータを生かせるのではないかと思います。そのデータを十分に活用できるような形というのを産官学でつくっていったらと感じました。本当に今日はありがとうございました。

中垣内：ありがとうございます。貴重な示唆だと思えますので，我々もそのあたりを考えながらまた今後新たなことにトライしていけたらなと思います。今度もよろしく願いいたします。

沼尾：色々な貴重なご意見いただきまして誠にありがとうございました。

では、今回、「地域住民の健康づくり支援に関する地域連携の可能性」というテーマで協力者会議を進めさせていただきました。様々な機関と連携を深めていくということで健康づくりが効果的で効率的に進められるということだけではなく、地域の活性化にもおそらく繋がるだろうと思います。今後は大学の強みを生かして地域に還元できるような取り組みを我々も考えていければと思いますし、また、健康づくりに対して地域の皆様も大学をうまく活用し連携していければと思います。

それでは時間となりましたので、本日の協力者会議をこれで閉会させていただきたいと思います。発表いただいた皆様に大きな拍手をお願いいたします。

本日は、ありがとうございました。

(了)